

## 比較表現における空間と時間についての一考察

長谷川玲子\* 加藤陽子\*\* 上原聡\*\*\*

産能短期大学能率科\*, 名古屋外国語大学(非常勤)\*\*, 東北大学国際文化研究科\*\*\*

## 1. はじめに

英語における比較表現には、比較級 *-er than*, 最上級 *-est* という文法化された形式があるのに対し、日本語にはそれに相当する形式的に確立された表現があまりない。「典型的」とされる構文にも、本来空間の概念を示す語彙のメタファーが数多く用いられている。本稿では、認知言語学的視点から日本語における比較表現の意味的な構造を探り、空間語彙、時間語彙の意味の拡張について考察する。

「比較表現」とは、広く捉えれば、二つ以上の事象を何らかの意図もしくはきっかけがあって比べる「比較行為」を経て、差異を判断し、言語表現によって明示したものと考えることができる。従って、いわゆる比較級、最上級に相当するもの以外にも、いくつかの事象の対照、対比など、様々な比較が含まれることになるが、本稿では、その中の二者の比較表現に関わるものに絞り、特に程度性<sup>(註1)</sup>を含む比較表現を中心に上げて考察を行う。まず、次節で基本的比較構文に用いられる語彙の意味について詳細に分析する。3節では、空間語彙の意味の拡張、4節では数は少ないが時間語彙の意味拡張について考察する。最後にまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 「基本的」な比較の表現

基本的、或いは典型的と言われる二者比較の表現、二者択一の疑問文は、次のようなものである。

(1) XよりY (のほう) がP。<sup>(註2)</sup>

(2) XとYと／では、どちら (のほう) が Pか?

ここで用いられる「より」「ほう」「どちら」は、いずれも本来は空間の概念を示す語彙である。他に言い換えはできないものかと思案するが、ほとんど不可能のようである。実際の用例も多く見られる。

(3) 北朝鮮チームのクァク・グムシル主将は「同じ民族が敵として戦った。10-0で勝った喜びより、無念の痛みの方が大きい。」とも語った。(朝2/4)

以下に、ここに用いられる三つ語彙について詳細に分析し、空間語彙による比較表現の意味を探る。

## 2. 1 「ほう」の意味

「ほう」の第一義として方向、方位を示す意味がある。(『日本国語大辞典』による：以下『大辞典』と記す)「方向」は、対象物を見る「視点」があってはじめて成り立つ概念である。ここでは、「視点」を、やや緩やかに、外部世界を認知し認知内容を言語によって表現しようとする主体が見ようとする対象、及びそ

の方向、視線という意味で用いる。<sup>(註3)</sup>

また、「ほう」の機能を、「方向・方位」「対比」「比較」を示すものに分けて分析するが、「対比」と「比較」の区別は、比較しようとする内容に程度性が含まれているか否かを基準とする。例えば、「とても」「もっと」などで修飾できるものを「比較」、できないものを「対比」とする。実際のデータの中には一つの文中に程度性を含む述語と含まない述語が混在している例もあるが、ここでは扱わない。

## 2. 1. 1 方向・方位を示す「ほう」

「横浜のほうへ歩く」のように移動を含む意図する動詞と共起した場合は、その方向への移動を示すことは明らかだが、動作や状態の場合はどうであろうか。

(4) a. 生徒たちの絵は教室の後ろに貼ってあった。

b. 生徒たちの絵は教室の後ろのほうに貼ってあった。

a)に示されている場所は、教室の後ろの壁一面のみを表し、b)は後ろの壁とそれに近い側面の壁をも含んでいる。つまり、後ろを見る視線だけでなく、後ろに到達する少し前からの視線を含んでいると思われる。このような視線の動きは、「後ろ」という方向指示語彙によって起こるのではないようだ。「後ろ」を「ドア」に換えても同じである。従って、「ほう」は、視線の向けられた先、先に到達する少し前からの過程(移動)を含むと考えられる。(5)は空間でなく、時間の流れを前後という空間のメタファーで捉えている、或いは、解剖実習の過程を終わりに向かう線のイメージで捉えていると考えられる。「耳の実験」はいちばん最後ではなく「最後の方」、つまり最後に近い時点で行われると解釈できる。

(5) 最後に耳を切って、壁に貼り付けて「壁に耳あり」とやって退学になった学生がいるんですが、それは可哀想なんです。だって耳は実験の最後の方にやるんだから。そこにいくまで随分かかっています。(解剖185)

## 2. 1. 2 対比における「ほう」

実際の用例を観察すると、二者の対比の「ほう」が頻繁に見られる。そして、ほぼ例外なく後に現れるものに「ほう」が加えられている。(6)では、読み手の視点を白ワインから赤ワインのほうへと導く意図が感じられる。

(6) 白ワインは、…。赤ワインのほうは、ツヴァイゲルト、ブラウ・フランキッシュの品種が主力である。(ワイン137)

最近よく耳にする(7)のような例も、「のほう」がなくても文は十分に成り立つが、話し手は客に対し、丁寧さを表現する意図で用いている

と思われる。

(7) 手さげ袋のほう、お使いになりますか。

「ほう」は、客の意識が他の方に向いている可能性に(職業的にせよ)配慮して「手さげ袋」へと導く役割を果たしていると考えられる。意識を向ける対象物だけでなくそのプロセスも示すからこそ、丁寧さにつながるであろう。この例は、一見対比には見えないが、潜在的な二者の対比と考えることができる。「ほう」によって、無数の選択可能な方向から一方向を選び、その他を選ばない、という対比が含意されるからである。<sup>(234)</sup>

以上のように、対比における「ほう」の機能とは、視点の移動を導く、或いは示すことである。また、典型的な比較構文において、「のほう」を加えると「対照が明示される」(安達2)ように感じる理由も、視点の移動のプロセスを語るからであろうと思われる。

### 2. 1. 3 比較における「ほう」

通常、「XよりYのほうがP」を典型として「Xは比較の基準」[Yは比較の対象](安達2)としているが、上に述べたように、「ほう」には視点の導くという機能があるため、話し手の意識によってXとYのどちらにでも付く可能性はある。

(8) A「袋に入ってるほうと入ってないほうとどっちがいい?」

B「そりゃ、入ってないほうより入ってるほうがいいよ。」

この例では、二者を対比させる二つの方向と、程度性の方向を示すスケールが重なっていると思われる。Bは、決して規範的な日本語ではないかもしれないが、

(9) B「入ってるほうのほうがいい」

と言うこともできるからである。そして、前の「ほう」は対比、後の「ほう」は比較の機能で用いられている。そして、「方向」という本来の意味が前者にはまだ強く残っており、後者は比較を表す機能語への文法化が始まっていると考えられる。

それでは、方向を示す「ほう」が程度性のスケール上で用いられるのはどのような理由によるものであろうか。直観的には、ある方向を示せば、その方向に顔を向けて目標物を見ようとするか、或いは、そちらへ向けて移動する。その途中には近い地点から遠い地点に向けての線ができる。それがスケール上の動きに拡張されたと考えられる。

視野の中に二つの要素を並べて差異を比較する行為が典型的な二者の比較行為であり、それぞれの差異を個別に表現することが「対比」、差異をある一つの性質について述べるものが「比較」と言えるだろう。<sup>(235)</sup> (3)の用例では、「喜び」と「痛み」について、その大きさの違い、感情の強さの違いをスケール上で示している。

(10)と(11)では比較の基準が明確に示されていないが、潜在的には存在すると考えられる。<sup>(236)</sup>

(10) そろそろ帰ったほうがいいですよ。

(11) ボク自身も、中盤サイドの地味な役割で、あんまり目立たない方だったと思う。(サッカー107)

まとめとして、「ほう」は基本的には、方向を指し、その視線の移動を

含む。対比においては、視点を目標物に導く機能があり、比較においては正負をもつ程度性のスケール上で程度の高いほうを示すという機能を持つ。見方を変えて、対比は談話上の方向、比較は述語の示す意味上の方向を示すことを考えると、後者のほうが意味の拡張が進んだもので、文法上の段階においても進んでいると言えらるだろう。

## 2. 2 「より」の意味

### 2. 2. 1 起点を示す「より」

寺村(1991)は、連体語句形成の観察の中で『ヨリ』が『カラ』と同じ意味で使われるときは、『博多ヨリノ到来』のように、カラと同様のふるまいをするが、比較をあらわすヨリについては、『N1ヨリN2』という形が思い浮かばないとして、『\*(エベレストの)富士山よりの高さ』等の例を挙げている(p242)。ここからも、時間または空間の起点を示す機能が基本にあり、比較の基準を示す機能はその拡張であると考えられる。

しかし、起点を示す格助詞には「から」もあり、現代の日本語においては「から」のほうが使用の範囲が広く、一般的であると思われる。「より」を起点の意で用いる場合は、「ただいまより開会式を挙行いたします」「13番線より14時5分の発車となります」「本日より三日間」など、改まった場、書き言葉に限定される。とすると、英語のthanに相当する語彙のない日本語の穴を埋めるべく、「より」が文法化されつつあるとも考えられる。

### 2. 2. 2 程度を示す「より」

こちらの「より」は副詞として程度の高いことを示す。比較のみに用いられる語彙だが、「欧文の翻訳で用いられて広まったもの」(『大辞典』)である。

(12) 奈苗は自分の方がより寂しい生活を送っており、より可愛そうな状況にいと信じている。(私小説22)

この用例の出典は、12歳で渡米した作者が自らの生い立ちを語った『私小説 from left to right』であるが、副詞の「より」が多用されているのは非常に興味深い。起点を明確に示す機能はないが、文脈、あるいは発話の環境の中に潜在的に比較の基準があり、それより程度の高いほうを示す。また、「より」の後には必ず程度性を持つ語が直接接続しなくてはならないなど、統語上の制約も大きい。従って、「より」の本来の意味からの拡張、文法上の形式の変化から考えて、比較表現として非常に文法化したものであると言えるであろう。比較表現「もっと」にも似ているが、一般的特徴を述べる文では「より」が好まれ、また、文脈から現在の状態が比較の基準であると解釈される場合には、「より」は使えない。

### 2. 3 「どちら」と「いずれ」

二つ事象から一つを選択する、という意味を含む疑問詞には、「どちら(及び、どっち)」と「いずれ」があるが、独立した疑問文では、専ら「どちら」「どっち」が用いられている。しかし、本来「いずれ」は「どれ」に当たるもので、文中に埋め込まれた場合、多数からの選択だけでなく二者択一にも用いられる。

(13) NPVとか、ROIとか、EVAといった言葉を眼にしたことのある方は多いだろう。…いずれも従来の日本企業の事業評価法に代わって事業の収益性を測る、より有効なものさしとして注目されていくものだ。(経営 52)

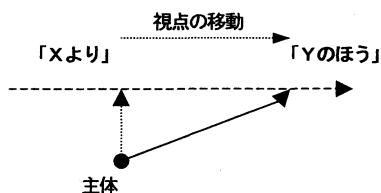
(14) 海外旅行かパソコンか、いずれにしても安くはないな。

英語の which と同じように選択肢の数に関わらず用いることができる語彙がありながら、現代日本語で二者択一の疑問には「どちら」が用いられるのは、比較の「ほう」と呼応する形が好まれるからではないだろうか。その変化の経緯は不明だが、これによって日本語における基本的な二者択一の表現は、空間語彙のメタファーによって整合性の高い形で構築されたことになる。

## 2.4 「基本的な比較の表現のまとめ

以上のことから、二者の比較表現における認知行為と言語表現との関係は、図1のスキーマのようにまとめられる。比較という行為を、基準であるXから対象であるYへと視点が移動して差異を認識することと捉えることにより、空間語彙「より」「ほう」の使用が動機づけが見えてくる。

図1 比較表現の原型「XよりYのほうがP」



これを原型として、「XよりP」「YのほうがP」のように一方が省略される場合もあるが、両方が省略されるとスケールが成り立たず、比較表現とは言えない。また、差異の大きいことを示す場合は例えば、「ずっと」などでXとY間の隔たりの大きいことを表す。また、視点と比較される事象との距離は、主体と外部世界との距離、または認知内容と言語表現との距離と捉えることができる。後者は、次のような「比較述語を持たない比較文」の例に見られる。<sup>(26)</sup>

(15) 驚くより、呆れてしまった。

これは、自分の感情を表現するのに、「驚く」と言うより「呆れてしまった」という表現のほうがいい、というメタ言語行為と捉える。言い換えれば、主体と表現の間の距離、「驚く」と「呆れる」との間に距離があると解釈される。

## 3. その他の空間語彙とスキーマ

ここでは我々がよく目にする空間の表現を取り上げる。非常に一般的ではあるが、意味的な偏り、文法上の形式など、用法は限定されているものも多く、慣用的な進化をしているのが見られる。スキーマの分類に関しては、例えば、移動動詞は「軌跡のスキーマ」と捉えることも可能である。また、量についても上下という線的動きに

置き換えてスケール上で捉えているとも考えられる。なお、ここに挙げるものは、紙幅の関係上ごく一部であることを断っておく。

### 3.1 遠近のスキーマ

(16) 中田に比べると中村ははるかに発言の回数が多く…。(サッカー8)

(17) 登山は…無償の行為に近いものである。(登山 49)

(18) 今大会のほとんどの競技は世界レベルほど遠い。(中日 2.7)

(19) 上位陣とそれ以外のチームとの実力差には隔たりがある。(サッカー37)

(20) キリスト教も政治も、占星術や錬金術や美術骨董の魅力に及ばない、つまり「俗事」に見えたのである。(芸術 66)

### 3.2 上下のスキーマ

(21) 必要以上に責任を感じて自分自身で負担を背負い込む…。(サッカー9)

(22) 神田氏の得票率は前回の六割を大きく上回る。(中日 2.7)

(23) フランス産の品種によって、先進の山梨のワインをしのごとくという意識もあった。(ワイン 20)

(24) 石炭と石油では経済効率は格段に違った。(経営 191)

(25) より深いアルコールの霧の中を彷徨いはじめた。そして、状況は一層悪くなった。(羊 78)

(26) ベルクソンの時間論を読んでもみるに越したことはない。(空間 79)

(27) 五万本を越えるぶどうが栽培された。(ワイン 19)

### 3.3 量の増減のスキーマ

(28) どの国にもましてよく耕された土地が見られる。(朝 2/5)

(29) 92年ものも…優秀ヴィンテージの94年ものにまさると思われる。(ワイン 185)

## 4. 比較における時間・空間

時間と空間の両方に用いられる語彙が数多くあるのはよく知られている。語源として、時間か空間か定かではないが、「ずっと」もその代表的な一つである。<sup>(27)</sup>また、上に挙げた「はるか」もよく「その時代よりはるか以前」のように、時間的な隔たりを示すのに使われている。時間は一方向に進むというイメージから程度のスケールに置き換えられる、という経路は容易に想像できる。また、移動に含まれる空間と時間との関係からも、時間の経過が「道」「移動」によってイメージされるケースもあるように思う。

「まだ」もその一つである。比較表現に程度副詞として用いられる「まだ」には用法が二つある。一つは、「もっと」に近く、スケールの程度の高いほうへ向けて視点が移動するという、「基本的な比較」に用いられる。

(30) 冷蔵庫より、この部屋のほうがまだ寒い。

もう一つの「まだ」の用法は、(31)のような例に見られるもので、比較の基準となる事象が程度の高い位置にあり、そこから低い位置にある事象へと視点を移動するものである。

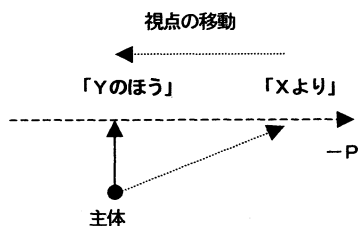
(31) この部屋より冷蔵庫のほうがまだ暖かい(まだいい)。

この例の述語は暖かさを示すものだが、「まだ」はそれをマイナスのスケールに置き換えてしまう。そして、寒さの程度の高いYほうを基準に、そのスケールの途中にある地点の程度を測ろうとする。一度遠いところを見てから、また近くへと視線を戻すようなイメージがある。この認知スキーマは、時間副詞としての「まだ」が「変化を前提としており(X)、その時点に到達していないこと(Y)ことを表す」というスキーマに通じるものがある。<sup>(22)</sup> さらに、

(32) あなたは、まだ幸せなほうですよ。

のように「ほう」と共起する例を見ると、スケールと逆方向に視点が移動することが明確である。

図2 「まだまだ」のスキーマ



この「まだ」のような視点を程度のスケールと逆方向へ移動を示す表現は、一見特殊な印象を受けるが、英語には less というごく一般的な語彙があり、使用頻度を考えると、日本語においても決して特殊な表現ではないと言える。

#### 4. まとめと今後の課題

比較表現には、二つの事象が客観的に存在するのではない。事象を見る主体があり、主体と事象間の距離、事象と事象間の距離、そこを移動する視点、そして比較される事象の性質という概念が内包されている。このような認知言語学的分析によって、空間語彙が多用される言語現象の動機づけを説明することができると考える。また、現在比較に用いられている空間語彙、時間語彙の中には用法上、形式上の制限のあるものも多く、文法化の現象が進んでいることも観察された。

今回は、ごく一部の基本的な比較表現についての考察を行った。比較表現研究の第一歩にすぎない。今後は、網羅的に比較を包含する語彙、の分析を行う必要がある。また、自然発話のデータからも用例を収集し、意味用法の分析と文法化現象の実態などを調査する必要があると考える。

#### 【注】

1. Croft(1991) の gradability の概念による。(pp.132-34)
2. (1)は安達(2001)による。(p2)
3. 山梨(2000)第一章を参照。
4. 森田(1989)は「ほう」の「複数から話し手の選ぶ側を指す」機能について言及している。(p1025)
5. 詳しくは木下(2001)、安達(2001)を参照。

6. 安達(2001)も同じ分析を提示している。

7. 用法については、奥村(1995)、佐野(1998)を参照。

8. 長谷川・加藤・上原(2002)を参照。

#### 【用例の典拠】

※左の( )は本文中の略称、本文中の( )内数字はページ(サッカー):『週刊サッカーダイジェスト』No.639(2002)(日本スポーツ企画出版社)

(芸術):『芸術新潮』10月号(2002)(新潮社)、

(ワイン):稲垣真美(1996)『ワインの常識』(岩波新書)、

(登山):桑原武夫(1997)『登山の文化史』(平凡社ライブラリー)、

(経営):島田隆(2001)『最強の経営学』(講談社新書)、

(私小説):水村美苗(1995)『私小説 from left to right』(新潮文庫)、

(羊):村上春樹(1985)『羊をめぐる冒険(上)』(講談社文庫)、

(解剖):養老孟司・南伸坊(1998)『解剖学個人授業』(新潮文庫)、

(朝):『朝日新聞』(2003) ※本文中( )内の数字は発行月日

(中):『中日新聞』(2003)

#### 【引用文献】

安達太郎(2001)「比較構文の全体像」『広島女子大学国際文化学部紀要』9, 1-19

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』(くろしお出版)

日本国語大辞典刊行会(編)(1987)『日本国語大辞典』(小学館)

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』(角川書店)

#### 【参考文献】

安達太郎(2001)「比較構文の全体像」『広島女子大学国際文化学部紀要』9, 1-19

奥村大志(1995)「もっと」についての考察『日本語教育』87号, 91-102

木下恭子(2001)「比較の副詞「もっと」における主観性」『国語学』第52巻2号, 16-29

定延利之(2002)「時間から空間へ? <空間的分布を表す時間語彙>をめぐる」, 生越直樹編(シリーズ言語科学4)対照言語学 東京大学出版会, 183-215.

定延利之(1999)「空間と時間の関係—空間的分布を表す時間語彙」『日本語学』Vol.18, No.9, 24-34.

佐野由紀子(1998)「比較に関わる程度副詞について」『国語学』195集, (1)-(14)

瀬戸賢一(1995)『空間のレトリック』海明社

長谷川玲子・加藤陽子・上原聡(2002)「「また」と「まだ」の意味に関する認知言語学的一考察」『言語処理学会第8回年次大会発表論文集』, 89-92.

山梨正明(2000)『認知言語学原理』(くろしお出版)

Croft, William (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. (The University of Chicago Press)

Uehara, Satoshi (1998) *Syntactic Categories in Japanese: A Cognitive and Typological Introduction*. (Kurosio Publishers)